戦争記憶の伝承 資料館を

人めぐり

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク　高谷　和生さん（64）＝玉名市

来年で戦後75年。戦争経験者の高齢化とともに、一段と記憶の風化が進む。飛行場や軍需工場の跡など、熊本県内各地に残る戦争遺跡を「無言の語り部」と捉え、調査・保存を進めている市民団体「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」の高谷和生代表（64）に活動の現状や課題を尋ねた。【城島勇人】

高谷さん　熊本に残る戦争遺跡の数は

A　県内には戦闘機を保護する掩体壕（えんたいごう）や軍需工場跡など756件が残されています。しかし、自治体間で取り組みに温度差があり、保護や活用が十分に進んできませんでした。

Q　保護活動の狙いと内容を

A　戦争経験者の高齢化で体験談を聞く機会が減る中、戦争遺跡の存在を知ることは、戦争の実相を知り、平和の大切さを感じとることにつながります。我々は県内各地の戦争遺跡をより多くの方に知ってもらおうと、リーフレットを作製したり、戦争遺跡を巡るツアーを企画したりして、戦争記憶の伝承に取り組んでいます。

Q　熊本地震では多くの戦争遺跡が被災しました

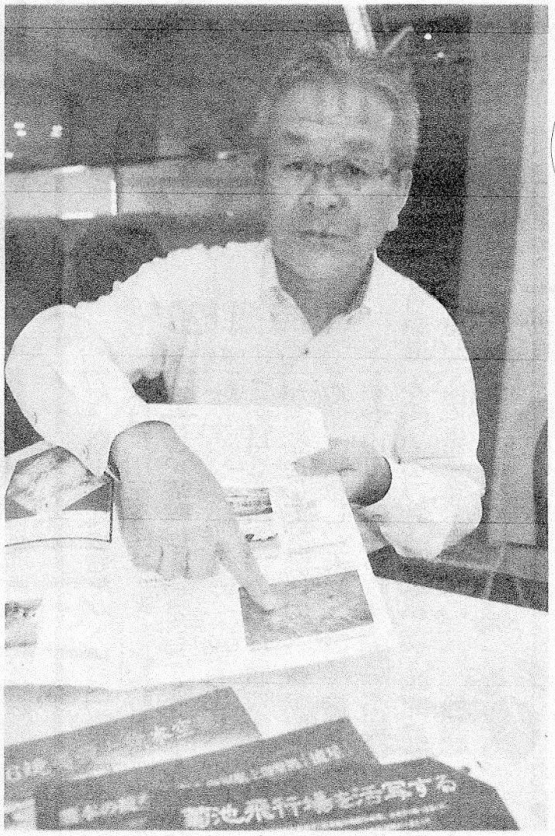
A　戦争遺跡の多くが未指定文化財であるため、個人所有者の修復費負担が壁になり、解体が相次ぎました。地震後は被災地を回り各家庭に眠っていた戦時中の新聞や軍隊手帳など約80点の戦時資料を収集しましたが、それでも多くの戦争資料が建物解体とともに処分されてしまいました。遺跡や資料の歴史的価値が伝わっていないと痛感しました。

Q　地震後は戦時資料の展示会を開いていますね

A　遺跡や資料の価値を理解してもらうために、県内各地で展示会を開いています。今年も7、8月に熊本市立図書館で開催予定です。戦時中の紙芝居や軍装品を展示するほか、旧陸軍の健軍飛行場（熊本市東区）の関係資料も紹介します。飛行場跡地には大学や病院が開設され人々の記憶から消えかけていますが、資料を通じて平和の大切さを考えてもらいたい。

Q　平和資料館の必要性も訴えていますね

A　熊本大空襲（1945年7、8月）の被害記録を伝える資料館が熊本にはありません。昨年5月に開設を目指す準備会を発足させました。鹿児島県には知覧特攻平和会館（南九州市）があり、宮崎県はホームページで県民の戦争体験を紹介しています。熊本でも戦時資料を展示し、平和学習ができる拠点をつくりたいと思っています。



たかたに・かずお　1954年、熊本県玉名市生まれ。大学時代に考古学を専攻し、熊本県教育委員会文化課や県立支援学校に勤務。2005年に「玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク」を結成し、県内の戦争遺跡の調査・研究に着手。14年に「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」に組織を改め、熊本大空襲の被害調査などにも取り組んでいる。